ORION HEART

オリオンハート2

●淫辱のスク水セーラー戦士☆

小説 神楽陽子　挿絵 さえき北都

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

Act.5　水着白濁の宴　007
Act.6　ふたりのオリオン　084
Act.EX　屍の女王　142
Act.7　汚辱のラビリンス　147
Act.8　屈辱のラストゲーム　200

登場人物紹介

Characters

有珠宮 葵（うずみやあおい）

優夏のクラスメート。名家のお嬢様で、趣味は読書と手芸。オリオンムーンに変身する。

朝霧 優夏（あさぎり ゆか）

明るく快活なスポーツ少女。勇者オリオンの力を継承しているオリオンサンズに変身する。

クローネ

ブラックキャッスルの幹部。秘かにギルダートに好意を抱いている。

『Act.5　水着白濁の宴』より

羽山の仮面を被ったアインがにやついて、獣と変わらない連中に提案する。
「犯るのは十分撮ったろ？　だからさ、今度は、こいつらにオナニーさせてみるってのはどうだ？　もちろんカメラの前でな」
「そうだな、犯りたきゃ、また後で犯ればいいわけだし」
彼の意見に全員が賛成する。もっとも、当の本人である優夏には、受け入れるつもりなどなかった。そもそも朝霧優夏は「オナニー」の意味さえ知らない。
「オナ、ニーって……はあ、なんなの……？」
ただ漠然と、卑猥なことであるとは想像できる。
「だったら優夏ちゃん、うふ、私が教えて差し上げますわ」
迷う少女に手を差し伸べたのは、親友の葵だった。
誰よりも愛しそうに優夏の横顔を覗き込んで、臍の筋をつうっとなぞり、スクール水着の水抜きへと右手を、不意打ち同然に突っ込む。
「ひやぁあっ⁉　あっ、葵待って……あたしさっきもイっちゃって」
観衆にもよく見えるよう、薄生地の合わせ目をひし形に広げて、絶頂直後で敏感すぎる秘裂をこじ開ける。清らかな愛蜜の代わりに、穢れた牡の原液が零れ落ち、水着の股底に溢れた。葵の指が肉唇を押しのけ、汚れてなおピンク色の花弁を綻ばせる。
（あたしも……葵も、何やってるの……？）
抵抗するべきなのだろう。しかし頭がぼうっとして、状況の変化に追いつけない。その

間にも淑女の繊細なほぐし指は、急所の位置を確認し、そこを優しく擦り始めた。
「あっ葵？　だ……だめ、そこしちゃ、やっ！　んくぁあ！」
今日の昼に散々味わわされたクリトリスの弱さを、仲間の手によって再現される。男性の手淫と違って、極端に力が強いわけではない。だが女性だからこそ知る、肉豆の慰め方にパートナーは長けており、優夏にとってはまた未知の快感を与えられた。
八の字に開いた太腿を引き攣らせ、腰をくいっと捻る。しかし水抜きが葵の手首を引きずり込んで、愛玩少女を肉悦から逃さない。
数回に一度はピンッと弾かれ、痺れが全身を駆け巡った。
「あくふぅん！　はあっ、すっ、すごぃ……すごすぎて、ろぉにかなっひゃう！」
小刻みで執拗なタッピングと、指の腹による摩擦のハーモニーが、めくるめく快美感をもたらし、優夏本人のエキスで股座を潤わせる。
たまらず背を反らせれば、小振りな双乳でも弾力を秘めて持ち上がり、スレンダーな女体に蠱惑的な曲線をつけた。
録音再生される猥音が女の子同士の、淫蕩のムードを盛り上げる。
ヌチュヌチュ！　クチュッ！　ヌチャヌチュヌチャ！
スクリーンでは、セーラー戦士でなくなった少女の朝霧優夏が、学園生活の中では溌剌とした小顔を、切ない朱色に染め上げている。
「そんなにしちゃ……ぁふう！　あっああ、あぉ、い……そこらめえ！」

「ここがとってもいいんですの。はあ……私の優夏ちゃん、もっと感じて？」
責める葵も、気品とはかけ離れた情欲を美貌に浮かべて、瞳を細め、優夏の股座を穿り返す。カメラの届かない股布の裏では、ピアノを奏でるように複数の指が蠢いた。
まさしく快感は旋律となって、快楽神経の琴線を震わせ、優夏の脳に甘い痺れを伝わらせてくる。さらに葵は横目遣いにスクリーンを一瞥し、もう片方の手を、優夏のセーラー服の裾へと潜り込ませた。
「優夏ちゃんの、んふっ、見てあげますわ」
スクール水着のネックを引き伸ばし、肩紐をそれぞれ端にずらす。実際には赤襟の制服に隠れた乳果を、取り出され、全員が注目する大画面で優夏は半裸になった。
「きゃあっ？　やだ葵、こんなの……は、恥ずかしい……！」
一度は後退した羞恥が戻ってきて、露出に顔を赤らめる。肩紐は腕を降り、薄生地ごと白濁を剥がされた生乳は麓を、水着の縁に食い込ませ、丸みを強調した。
桜色の突起が輪郭を整え、ささやかに揺らす。
それから葵も、映像では学園指定の紺色スクール水着を同じく半脱ぎにして、豊乳の全容を初めて晒す。多数の男子が見ているにもかかわらず、むしろ見られる羞恥に、淫らな気分は高まっていった。
大きさの異なる美乳をカメラがズームアップした。日焼けの跡がなくとも視覚可能な円を、男どもが脂ぎった視線で吟味し、あちこちでシャッターを切る。

「でかいって、葵ちゃんのオッパイ！」
「俺は優夏ちゃんくらいのが好みかな。可愛いじゃん？」
潤沢のスクール水着にフラッシュを浴びながら、葵は手首をくいっと返し、優夏の秘裂を指で抉った。あたかも己こそが自慰をするかのように、的確に肉豆を擦り、スペルマの溜まった秘壺に中指を差し込む。
「優夏ちゃんったら、あぁん、こんなにどろどろにして……」
粘膜襞の深さで、牡汁を念入りにかき混ぜ、続いて薬指も侵入させる。
「あはぁあッ！　あおぃだめ、らめったら……気持ちよく、はぁ、なっちゃうから」
性に初心な少女は、卓越した手淫に膝で立ってもいられず、葵の柳腰に抱きついた。快楽のパルスが速くなり、鼓動のビートを響かせる。
（すごぃ葵、上手……またイク、葵にイかされちゃう！）
精液臭の吐息が灼けて、舌根に残った汁を温める。それを口蓋に塗り込むようにネチャネチャと反芻しながら、力ない表情の優夏も、親友の弱い部分に手を忍ばせた。柳腰から熟したお尻を撫でおろす。
スクール水着の底は前から後ろまで、左にのけられており、障害物は何もない。
「あたひだけ、なんてだめ……だから、んあっ葵もぉ！」
責められるだけでなく、責める興奮も込み上げて、パートナーの暴かれた肛門に人差し指と、同時に中指まで捻り込む。途端に葵が満足そうに色めいた。

「やぁん優夏ちゃん、そこ、そこおっ！　らめなんです！」
「葵も一緒、あたしと一緒にイクの！　はあっ！　んあっ、ぁあはあ！」
官能の連鎖から抜けられない。親しい彼女の温もりと昂りが、スクール水着越しにも伝わってくる。お互いの柔乳を押しあいへしあいし、しこり勃つ蕾を組みあわせる。
間にはセーラー服が挟まっているはずなのに、スクリーンに浮かぶ映像が不思議と体感的なものとなり、肌と肌の密着感も強かった。
ヌチュッ！　ヌチュクチュヌチュ！
摩擦の回数が指の動き以上に多いのは、ざらつくグローブのせいだ。爪が立ってしまう角度でも、おかげで痛みは生じない。甘い悦感を粘膜器官に、指先の届く限りの深さまで送り込んでは、キス寸前の至近距離で吐息を交換する。
「はあっ葵！　もっと、もっとグリッてしてぇ！」
「優夏ちゃんも！　んふぁあ、おっオシリ、オシリ捲れひゃいます！」
ふたり逆に腰を捻って、谷間を入れ替えし、弾力を秘めた柔らかさを堪能した。
（あたし、葵と……）
普段なら生理的嫌悪もあったかもしれない、アブノーマルな同性愛が、少女に新たな意欲を獲得させる。優夏も葵も、汗みどろの太腿を打ち震わせて、愛蜜を伴う粘性の糸を股間から垂らした。膝立ちの姿勢はどちらも崩れそうだ。
「やっ！　葵そんな、はあっ激しい！」

小さな足の指でプールサイドを踏み締めて、パートナーの指捌きに悶え、躍動的な空腰まで打つ。葵の右手は正確無比に、隠れがちな肉豆を摘み取り、その指で尿口にも差しかかった。それこそ、得意の手芸でもするかのような腕前で。

「くふっ優夏ちゃん！　優夏ちゃんのもオシリで、んあっ、すごいれすわ！」

対抗して優夏も葵の肛門を拡張し、人差し指と中指を編むように穿り返す。中の牡汁をかき出しては、傾きを変えて潜入する。

グチャグチャッ！　ヌチュッ！　ズチャッ、ヌチャヌチュヌチャッ！

女の肉体でこそ可能な水音に、男子一同は劣情を催し、自ら勃起を扱いていた。

「たまんねえよ、優夏ちゃんも葵ちゃんも！　マジでオナニーやってるぜ」

「レズってヤツかよ。こっそり学校でヤってたんだってな」

学園でも噂の美少女たちは、空いたほうの手で、自分のものではなく羨ましい髪をかきあげ、背筋をくすぐりあった。

オリオンサンズは飾り布、オリオンムーンにはスカーフのマントがあっても、粘液の量が多すぎて、布の感触は紛れてしまっている。

本当にスクール水着一枚だけで、互いの肉体に汚濁を塗りあうかのようだ。

「葵とっ、あたひ葵ともう、んはあっ気持ちよくなっちゃう！」

「優夏ちゃあん！　ああんっ、ユビ！　ユビ動いれます！」

柔乳の豊かな弾力をぶつけながら、括れた腰を抱き寄せ、各々の悪戯を加速させる。葵

の右手はクロッチから食み出すほどに、優夏の股座で暴れ、肉花弁を攪拌した。
「あぁんっ葵だめ！　イクっ、イっちゃあぅう！」
その穴から無限に白濁を湧き立たせる優夏も、手首ごと二指を捻り、淑女の肛門を無遠慮に弄り尽くす。指先ひとつにも敏感に反応するパートナーに、前から心の奥底に潜んでいたのかもしれない感情が込み上げた。
「葵も感じて？　はあっ、オシリ？　オシリもっとしてあげ、くふう！」
「優夏ちゃんもですわ、あぁん！　そこっ、そこれすの！」
友情も愛情も倒錯し、相手に弄ばれ、同時に弄ばれもする、被虐と嗜虐の循環。穴の形を変え続ける濡れ肉が過熱して、悦痺れを全身に走らせ、スクール水着の少女を金縛りにする。身悶える葵もなで肩を斜めに、巨乳をぷるんと転がした。
「あっうふあぁあん！」
ぶつかる乳芽でも、快感が電気の針となって無数に刺さる。空腰に弾みを持たせて、悦がりまくり、真っ白な恍惚感に頭の中身を吸い込まれていく。ふたりの学園少女は、牡汁を浴びせられた肉体に、病的な痙攣を漲らせ、オーガズムの荒波に飛び込んだ。
一緒に仲良く、相手のスクール水着を引っ掴んで。
「オマ〇コれるっ！　葵に出されひゃうぅオマ〇コ！　おぉ、おま〇こぉおおおぉおおおおおおおおおおおおおッ！」
男子の体液を薄生地の股底に噴き出す、自慰も知らなかった朝霧優夏と。

「オシリ出ます！　れますっ、ひあっおお、オシリまたイクイクイクイクッ、オシリがぶちゃぶちゃイっちゃいますのぉおおおお！」
同じ白濁汁を蛇口全開と変わらない勢いでひり出す、はしたない有珠宮葵。
ブシュウウゥウウウッ！　ミチミチミチッ、ブチャブチャブチャ！
甘美なエクスタシーの激流に、歳若い少女たちは肉体を丸ごと呑み込まれ、平衡感覚を消失した。肉悦の臨界まで打ち上げられ、声高らかにいななく。
「あああぁぁぁぁあああああ……！」
刺激の強すぎる美少女ふたりのオナニーショーに、観衆の逸物は一斉に決壊し、弾幕とも喩えられる大量の欲望を吐きまくった。
「エロいオナニーしちゃってよお！　ハアッ、あの優夏ちゃんが葵ちゃんと！」
「ハアハア！　もう俺、たまんね！　おー出る出る、すっげえ出る！」
ドビュドビュドビュ！　ビュルビュルッ、ビュルビュルビュル！
ビクビクビク！　ビュクッ！　ドクドクドクドク！
白弾のすべてが魔法陣の影響で、ふたりのスクール水着に命中し、独特の紺色と白濁の淫猥なコントラストを完成させる。
スクリーンには学園二大美少女の、惨めな結末が鮮明に映し出されていた。青臭い腐臭がプール一帯に蔓延し、咳き込む男子もいる。
絶頂の十数秒は、十数分にも感じられ、やがて優夏と葵はその場に崩れ落ちた。プール

サイドは沼地そのものと化し、虚脱する手足を滑らせる。
「ぁ……ゆ、優夏……ちゃん……」
凄烈な快絶に有珠宮葵は疲れ果て、気を失ってしまったらしかった。
水抜きから原液を漏出させる朝霧優夏も、闇に落ちる寸前だ。
「あっく、あ……あぉ、い……あたし……？」
ところが脳裏に一筋の光が差し、優夏だけはかろうじて我を取り戻す。
（……あたし、は……？）
覚えのある気配に呼び覚まされた。
（きてる……これはあたしのサンズクリスタルと……邪悪なヤツも）
直感できた、サンズクリスタルが近づいてくるのを。
男子生徒の輪を広げたクローネとアインが、セーラー戦士の敗北絵図を嘲笑った。
「ウフフフッ！　いいザマね、オリオンサンズ！　とおってもお似合いだわ」
「ハハハ、有珠宮さんも……いえ待ってください、クローネ！」
突然、物理的ですらあるプレッシャーが宴の会場を覆い尽くす。魔族は耐え抜くことができたものの、普通の人間に過ぎない男子生徒は次々と倒れていった。
クローネとアインは揃って乱入者を見上げ、絶句する。
「気は済んだか？　アイン」
夜空の頭上高くに現れたのは暗黒の城主ギルダート。

『Act.6　ふたりのオリオン』より

ヌチュヌチュヌチュ、ヌチュ……ゴプゴプゴプ！　ゴボゴボゴボゴボ！
「あっくふ！　ひはぁ、はあっン！　くぁあ？」
異音を立てて出口近くに中身を運ぶも、力のベクトルを逆転させ、がぶ呑みする。擦過の一往復がアナルの快美を閃かせて、悦濁に脳を溶かされそうだ。無数の痺れと電気の針が、汗だくの肉体を一斉に襲う。
それはすべて肛門が勝手にしていることだ。飛び出そうとする幼体を留め、数段重ねの角張った雁太による攪拌を、自ら招き入れ、原始的な快楽を貪り尽くす。
「とめて！　あたしのおひりっ、オシリとめ……あふうッ！」
這い蹲って頬を牡汁の波に浸し、無力な涙を浮かべてまで拒絶しても、浅ましい尻穴は咀嚼をやめない。肛悦に背筋をのけぞらせてよがり、スクール水着を滲ませる。
すでに産まれた二匹もいよいよ行動に移り、優夏の若々しい肢体に舌と尻尾を伸ばしてきた。液濡れの拷問道具には、女体を締め上げるに適した柔軟性と厚さがあり、先端で腫れあがっているのは、亀頭を三段も重ねた歪な魔根だ。
『グルゥルルル！』
女を肉穴人形にすることしか本能にない、下劣な生き物の舌が、尻尾が、セーラー戦士の華奢な手足にシュルッと巻きついて。少女の軽い体躯を床から剥がす。
スクール水着から食み出す太腿を、水平限界に座らされた。
「気持ち、悪ぃ……いや、やめて……ひぎぃいいいッ！」

蔓状の触手は、優夏の細身から無限に垂れる、タールのような汁糸を集め、やじり型の先端を滴るまでぬめらせる。そして水抜きからスクール水着の裏へと潜り込み、薄生地と肌との粘着空間を泳ぎまわる。

セーラー服にも数本を通し、裾から襟をくぐり抜けた。ショートヘアをかきあげ、調髪が不可能なくらいにもつれさせる。

「はあっ！　んふぁ、何するのよバケモノ――おむぐう⁉」

しどけない唇に奇襲も受けた。人間のペニスに酷似した形の、赤剥けた頭部は、少女の歯よりも硬く鋼鉄のようで、口角を裂かんばかりに太い。触手全体が一本の血管そのものに脈打ち、先端をいっそう雄々しく膨張させる。

込み上げた吐き気は食道に押し戻された。

「んぉむ、もごぅぶ！」

精液交じりの涙が唇の結合部を虚しく潤す。その間も少女のアナルは、排泄とは違ったうねりで異物を食い締め、肛悦を高める。尻穴は開放を待ち侘びていた。

触手の模様をスクール水着に浮かべるオリオンサンズは、醜い魔根をチュウチュウと吸わされながらも、悩ましそうに腰をくねらせ、上体を斜めに反らす。

仰向く乳肉の重量が肺を圧迫する、口枷にも呼吸を妨げられて苦しい。肉太でみっちりと塞がれた唇からは、くぐもった喘ぎと汁が無力に漏れた。

「ひあっぐ、苦ひぃ……んっ、あぁぐ！」

触手による緊縛も固くて熾烈だ。異形の生物にスクール水着ごと肌をねぶりまわされる、汚辱と一体の嫌悪にも、美少女戦士はたまらず身を捩り、かえって余計に数多くの肉蔓を絡みつかせてしまう。

悶える少女の汁みどろの肢体を、好き放題に貪り、意欲を昂らせた魔物どもは、上向きに揺れる双乳の周囲でもおぞましい気配を窺わせる。

スクール水着の裏側で、発育のささやかな乳膨の麓を無理に括られた。

「あぶぅ！　んっく、やめて……もぉ、許ひて……！」

少女の拒絶に魔物は耳を貸さず、完全に優夏は人形扱いだ。

『ウォオオオ！　オオッ、オオオオオ！』

同時に太腿も触手の螺旋に捕らわれて、乳房もろとも、女の比較的柔らかい部分を押し揉まれる。気味の悪さに慣れてしまいつつある感覚は、刺激を正確に読み取り、肉体の快楽を増大させた。

（だめ……とまん、ない……ッ！）

堪えきれない疼きが勃てた芽を、セーラー服の上から何度も弾かれる。甘い痺れが両肩に突き抜けて、うなじをくすぐり、悦感は頭の中にも染み込んでくるかのようだ。

乳頭ではまた、これまでにない別の圧迫感が生じる。

「んむぉぶ⁉　んむっ、あぅむ」

太すぎる口枷のせいで言葉ひとつも作れない少女の、乳突起が親指大に膨らむ。出産に

同調して母乳を生成し始めたのだ。
「あッ！　……あはぁあ？」
熱い分泌感が小道を左右別々に駆け抜け、滲み出ていく。心ならずもセーラー戦士の瞳はとろんとして、涙の意味を変えていった。感度の強い先端は、スクール水着のざらつきにも反応し、肉体に乳悦の波紋を重ねる。
拍動のごとに、温かくて新鮮なミルクがびゅるびゅると飛び出した。
「あぐっんふ！　おもぉ、お……ぉおっむ！」
曲線に吸いつく薄生地に、じわりと自分の熱が染みていく。
（オッパイが変……イっちゃうの……？）
不規則なリズムに焦らされ、それだけ吐出の一拍を待ち遠しく、そして心地よく感じてしまう。ミルクの芳香は稀に混ざって、精液をいっそう生臭くにおわせた。粘り気ある母乳は胸の谷間にも浸透し、そこにも触手が通過する。
一回ごとの分量も多くなり、なで肩が壊れそうなくらいに震えた。
続けざまに。
「――ひぁぐう⁉」
肉壺の喪失感を埋めるように、次の幼体が産まれて胎内容積を圧迫する。魔物はひとりの少女の、すべての肉穴を蹂躙していた。優夏本人も無意識に撫でさする、樽形になった重たいぽて腹を、複数の触手がきつく締め上げる。

「おぐっう、んごぃぃぃぃ！」
舌か尻尾ともわからぬ数本は背後にまわり、スクール水着の尻谷を割り広げた。すでに産まれた二匹は、幼い少女の胎内と排泄器官に潜んだ「弟」を引きずり出すべく、入り口と出口をこじ開けもする。
（アソコも、オシリも……壊れちゃう……！）
もはや何に感じているかもわからない、快絶の奔流に押し流され、優夏の精神力は砂のように脆く崩れた。双穴の奥で生じた物理感は灼熱と化し、悦痺を弾かせる。
「もぼぅぐうッ！」
触手の先端を頬張り、異形の「我が子」をあやしながら、肉体も臨界まで駆け上がっていく。もごもごと勝手に唇が動いて、エラ越しにペニスの首を吸引した。
「ひぐっ、もぉイぐの、ぁたひ……んちゅっぶ」
抗いようのない悦びに脊髄を打たれて、空腰を振り、妊娠後期のお腹を揺さぶる。両手は触手の中腹を掴んで、アンバランスな姿勢を数秒間だけでも維持する。
泥のように混濁していた頭の中は、甘美な法悦にくり抜かれて、セーラー戦士は真っ白な虚空へと飛ばされた。
「出ひゃう、出ちゃうっ……れひゃぁうううぅぅうううう――――――ッ！」
自分でも何を叫んでいるのかわからないまま、伸びやかにのけぞり、後頭部を下に転落するような飛翔感に腰を打ち上げられる。

沸騰のような痙攣が全身を駆け巡って、粘膜器官はどちらも収斂し、牡汁もろとも怪物の子をひり出す。
ブチュブチュブチュッ！　ヌチャグチュグチュ！　ミチミチミチッ！
幼体の環節がスクール水着の水抜きからニュルニュルと現れた。産道が容積以上の異物で詰まろうものなら、お腹全体を搾られる強制分娩だ。
「ひはぁ、おひりも……出る、出る出る、出るのぉおおお！」
放出感をうわごとのように吐露しながら、盛り上がった肛門からは、水着の股底に黄濁の塊を産み落とす。
分娩と排泄と絶頂を同時に味わわされたオリオンサンズは、蕩けるようなアクメの連鎖に恍惚として、なよやかな相貌に卑猥な艶笑を浮かべた。
計六本の触手に抱かれて。
「あ……あはぁあああ……！」
粘膜そのものが痺れるような摩擦と、肉穴が最大拡張する瞬間の生理的な悦楽に、充足感すら味わう。本人の意志は別にして、涙多い瞳はぼうっと惚けて、緩みきった唇は野良犬同然に舌を垂らす。フェラチオの最中でもあった。
ビュクンッ！　ビュルビュルッ、ドプドププ！　ビュクビュクビュクビュク！
その舌に裏筋を添える触手を始め、魔物が続々と陵辱汁をしぶかせる。
人間男子のものよりも黄ばんで粘りが強く、漂う青臭さの濃度を増す。火照った肉体を

上まわって熱く感じられる液体は、スクール水着の裏側を蠢くように流動し、水抜きから幼体を追って漏出した。

アナルを脱した一匹は、排精を終えた触手に尻布の外まで引きずり出される。他の数本は拍動を弱くしても、スクール水着の中に頭部を深く潜行させたまま、うら若い少女の肢体を締め続けた。

「……っはあ！　はぁ、んふあ……んはぁあ」

絶頂から降ろされた優夏はかくんと脱力し、双眸を前髪に隠す。その間に三匹目と四匹目の新生児が、邪な産声をあげ、早送りのテープのように生体まで姿を変えた。

楽になれるのだろうか、このまま意識が飛んでしまえば。

「あぁ……いっ、あう？」

しかし優夏の自我は、皮肉にもサンズクリスタルとの共振作用によって保たれ、再び悪夢と変わらない現実に戻されるのである。

快楽とは名ばかりの生き地獄へと。

「はあ、はぁ……も、もう……ひぐっ、許して……」

屈辱の鼻水を呑んで、嗚咽も堪えられず、悪魔どもに許しを乞うオリオンサンズ。自分があまりに惨めで、ちっぽけで涙が止まらない。それでも嬲られ続けるよりは。

「お願い、だから……」

歳相応の少女の弱さが、これ以上の陵辱を拒む。逃げ出したくなる。

『Act.8　屈辱のラストゲーム』より

性感帯の待ちきれないこそばゆさは肌にも広がり、無性にくすぐったい。
オリオンサンズは頑丈な肉柱を支点に、バランスを危うく保ち、空いた両手で無意識にお腹を撫でまわしていた。
反り身についた曲線を自ら堪能するような仕草が、悩殺的で狂おしい。
「はふうっ……抜いて、ぐぅ……苦しいから」
しかし濡れそぼったスクール水着の上からでは肌を擦れず、悶々とさせられた。粘性のおしべが徘徊しても、十分な刺激にはならなくてじれったい。
もう少しの距離で触手は乳芽を外れてしまう。
鼓動はペースをはね上げて、小振りな乳果を揺らし、動悸に肺も熱化する。しどけない唇から捨てられる吐息は、高温多湿でしかも、喘ぎに織り交ぜられた。
「やめ、てって……ぃ、いってるじゃない……！」
言葉では拒絶しながらも、切ない瞳は官能に飢え、陵辱者たちの嗜虐性を過剰に煽ってしまう。複数の血眼がギラリと光って、美少女戦士をねめつけた。
暴虐の肉棒が前後に動き始める。
ヌチャヌチャヌチャ、ズブズブッ！　……ヌチャヌチャッ、ズブズブ！
「あああぁッ⁉　やっ、動いちゃや、だめっ、らめぇえ！」
雁首が見えるまで抜いては、一息に戻す。玩具扱いのオリオンサンズが後ろに傾いた姿勢のために、体重がかかって、効率的にエラと擦れる。幼い膣がいかに狭苦しくとも、魔

物の筋力は勢いある反復運動を可能にし、肉襞をかきまわした。
「いやぁああ！　っあん！　ひはぁあ！」
中身が動くというよりも、肉路のほうが蠕動するかのような体感ピストンだ。優夏自身は拒む一方で、火照った肉体は拒んでくれない快感を与えられる。
「激しくしないで、っはあ、あっあたしが壊れちゃう！」
ゴリゴリと大物を抜き挿しされる蜜壺が甘く痺れ、油のエキスを煮え滾らせた。子宮に先太がぶつかるたび、悦痛を脊髄に響かせ、華奢な腰をかち上げる。
尻穴はエビルラフレシアを揺らし、茎の振動を直腸へとダイレクトに送り込む。
「あむっんくふぅう！」
自分で聴くのも恥ずかしいソプラノボイスをあげて、優夏は、股裂き同然のファックに悶絶させられた。一撃一撃が暴力だ。
額に玉の汗を浮かべて、水浸しのスクール水着の臍部に掴まり、しなやかな身体を波打たせる。そのうえで首ものたうたせ、ショートヘアを振りまわす。
「とまって！　おくっ、おぉ、またおくぅうッ！」
回数を重ねるごとに雁太はＰスポットに速く、確実に当たるようになった。アナルの物量もあって、前に圧力が生じ、粘膜襞を密着させて、剛直をいっそう味わわせる。
肉壺を中心に生じる牝痺れは、脳髄にも到達し、激突の瞬間は思考を白く瞬かせた。意識が飛んでしまったほうが、むしろ楽になれるかもしれないのに、めくるめく悦感に頭を

揺り起こされる。たまらず卑語も飛び出す。
「あやぃあ！　ひぃっぐ、おっ、おぅお、オマ〇コとめて！」
股座から離れた乳頭さえ、電気の針でも通されたかのようにビクビクとする。自分の肉体に裏切られていくのを刻々と痛感させられた。
（なん、で……あたし……ッ！）
快楽には打ち勝てないことが悔しくて、一粒の涙を堪えきれない。そうして少女らしい弱さを綻ばせたベビーフェイスに、両隣の魔物が腐肉をなすりつけてくる。
青臭い空気が鼻先に近くなり、頬にぐにぐにと判を押された。
「近づけぃ、でっ、おぐぉう⁉」
左手は間に合ったものの、右手は遅れて、苺色の唇を突き破られてしまう。
歯を立てられない太さの肉塊は、口枷となって唇に栓をし、刺激臭を鼻から涙腺へと通過させた。吐き気は咽を出る寸前で、物理的に食い止められる。
「んもごぉおッ、おぉお！」
男性器に対する嫌悪感と、目に染みる悪臭のせいもあって不味い。口が開くならすでに吐き出している強烈な苦さだ。
口内容積に比べて肥大な雁太は、苦しげに優夏の舌が動くたび、ビクビクと脈打ち、生臭いカウパー腺液を先走らせた。鼻の奥に悪臭がツンと込み上げてくる。
「ぉんはの、もっ、おっきふぃれ……むごぉむ！」

喋ろうとしても舌足らずな口調になり、腫れた亀頭を必要以上に舐めてしまう。涙目で見上げると、魔物は少女の強制口姦に興奮し、調子に乗って肉茎を深く押し込んだ。

舌を逃がせるスペースはなく、屈辱の奉仕を続けるしかない。

「あむぉおおっ？　ぉぷ、んぢゅぅおぶ！」

呼吸を妨げられた分、強く吸引し、雁首に這う舌先を旋回させる。粘着質の唾液を増量して、瘤肉を丹念にねぶり、味わう。

優夏は赤子のように頬をもっこりと膨らませ、涙に濡れた唇で、幹胴にチュウチュウと吸いついた。普段よりも幼く見える「おしゃぶり」の顔は、快楽と恥辱の、二重の責め苦に紅潮し、力ない眉の下で瞳はとろんとしている。

先走り汁が咽を逆流して、鼻孔から垂れ、唇の接合を潤す。

「むっぢゅ、おぉもっ、ぐむ！　ぬっ、ぬぢゅっぱ、むぉ、抜ひて！」

たった一言発するだけでも息絶え絶えだ。

口と膣には枷のペニスを、肛門には植物の根を茎まで嵌められた肉穴人形は、無理強いのフェラチオで動かせなくなった首の代わりに、乳房ごと腰を弾ませた。スクール水着の潤沢が女体曲線を強調する。

「動ぃへ、るっ、ぬぼ、おひんぃんがうぼぃえる！」

薄生地の裏では大群のおしべが一斉に蠢きを再開した。背中から脇腹と、なで肩越しにも双乳に群がって、膨らみを按摩する。しこり勃つ両方の角（かど）をそれぞれ括って、剥き出し

の性感帯を上下左右に引っ張りまわす。
「らめぇえぐっ、もぉおぶ！　おっむぉお、ひぅむッ！」
セーラー服の襟元から溢れた数本は、首筋をまわり、襟足をぞわぞわとかきあげた。上の穴も下の穴も似た猥音を競わせる。
グチュッ、ヌチュ、グチャ！　ヂュパッ、グチュ、ヌヂュッパ！
「あぷぅむ！　はあっ、あっおぐ、ぉむっぢゅるぷ！」
意識は朦朧として、自分が今どちらのペニスで感じているのか、ハッキリとはわからなかった。触手に捕食されるのが一番なのかもしれない。
（お、おちんちんが……）
恐ろしくも肉体は、男性の勃起を世話する方法を覚えており、吸い音を立てる唇だけでなく、左手に握り締めた肉棒も按摩する。グローブで磨くようにゴシゴシと、茎胴を扱きたて、親指を裏筋に捻り込む。
数秒に一度は人差し指で亀頭冠をくすぐる、絶妙なテクニックだ。
（おちんちん、し、しなくちゃ……もっとしないと）
剛直は火で熱せられたように、てのひらに熱く、優夏の体重程度では曲がりもしない丈夫さで、斜め懸垂の姿勢を支えた。尖った鈴口は尿道の開通液を滲ませている。
自分の唾液臭の混ざった腐臭が立ち込め、淫蕩の酔いもまわる。
「……んぷっはあ！　はぁ、ひは、お……ぉむろ」

窄まる唇から涎たっぷりに先太が抜けそうになっても、優夏は夢中で、息を継ぐより先に舌で追いすがっていた。亀頭冠を前歯に引っかけて、裏筋の窪みを舌先で穿り、異形の魔根を逃がさない。れろれろと。

させられているのか、それとも自分でしているのか。

（あ……あた、し……何やって……）

ただ始まった肉悦を、今さら途切れさせられなくて、淫欲に耽ってしまう。頭の中はぐちゃぐちゃに混濁し、快感にだけ白い光を閃かせる。

視界には桃色の靄がかかって、魔物の巨体を背景へと遠のかせた。逆にペニスと触手の存在は、五感すべてを占拠し、においも味も無限に巡回させる。

（とまん……ない、……の）

睫毛に隠れた双眸は、剛直が至近距離で口を出入りするのを眺め、ひしゃげる唇は端を小さく吊り上げていた。食欲の汁がセーラー服に滴り落ちる。

スクール水着もぬめってどろどろだ。

「はぉぢゅっ、んむぉ！　らめ……お、おちん、ちん……あ、あふぅい」

被虐的な本性を現し始めた美少女戦士は、人外のレイプでこそ興奮に拍車をかけて、浅ましい牝穴の涎を白濁させた。肉壺では攪拌棒が襞ともつれ、長さを活かしたストロークで秘粘膜を引き伸ばす。

痺れが終わらないうちに次の痺れが始まり、法悦を膨らませる。

「んぐっぃひ、おぉぐ！　あもぉお！」
フェラチオにも欲を出し、肉の返しを吸い尽くす。
猥音を聞き分けられない耳にクローネが誘惑を吹き込んだ。
「ちっちゃなオマ〇コのくせに欲張りね、お口でもチンポ食べちゃうなんて。……けどいいのかしら？　もっと、もぉっと我慢できないオシリはそのままで」
「あぷっ、お……おひ、り？　お……オシリは」
クローネの存在を忘れかけていたオリオンサンズは、暗示にかかりそうな頭にひと欠片の理性を残し、躊躇する。あとひと押しの快楽は優夏本人に委ねられた。
膣内の前後運動はぴたりと停止し、口枷も糸を引いて外れる。昂った肉体は途端に煩悶とさせられ、自らの動悸に疲弊する。望んだはずの中断が苦しい。
触手に乳果を持ち上げられるだけでは物足りない。
（お……オ、シリ……！）
特につらいのはアナルだった。花の茎を植えられこそすれ、肉門を食い荒らされるわけではない。肝心の粘膜に刺激を与えられないのである。
擦りたい。今すぐ穿りたい。
「あぅ、あ……だめっ、ぁ……あたし」
切迫する欲求と拒絶する精神の板挟みにされ、葛藤させられる。肉体はぬらつく悶え汗を沸騰させて、病的な痙攣まで起こし、セーラー戦士を強迫した。

「ガマンなんてれきない……！」
おもむろに右手を後ろに伸ばして、茎を掴む。それを引きずり出すにしろ、押し込むにしろ、すべては自分の心次第だ。しかし決めあぐねていられる余裕もない。
「オシリっおお、オシリにも、ほっ、欲しぃの！」
捻り込む手に力が入った。肛門をめり込ませたら、返す手首で引き抜いて、ピストンを反復させる。中身の移動に連動する直腸を、伸び縮みさせ、穿り返す。
ヌリュヌリュヌリュ！　ズポッ！　ズプズプ、ニチニチニチ！
「ずぼって、ず、ずぼずぼって！」
目に見えない摩擦の位置と回数を、排便同然の音が実感させ、仮に自慰にしても破廉恥すぎるアナルプレイは羞恥心を炎へと投げ込んだ。恥ずかしい、けれども心地よい痺れをやめられない。喜悦が背骨を舐めるように駆け上がってくる。
「くふぅうん！　オシリ入ってる、おっ、おひぁあ！」
アブノーマルな肛門自虐の羞恥さえ、淫らな高揚感にして、発作的に昂ってしまう。性感帯のすべてで血潮が感じられるまで、胸の鼓動は大きく速くなり、セーラー服もろとも柔らかな乳房を揺れ弾ませた。もう引き返せない。
「オマ〇コもっごりごり、して！　はあっ、さっきみたぃのもっとお！」
触手の波を泳ぐように身を捩り、肉棒の根に花弁でキスをする。
魔物どもは息を荒げて少女ひとりを暴行し、数にあぶれてオリオンサンズに近づけなけ

れば、視姦の自慰に耽っていた。性臭が極端に濃くなる。
肛門に咲く花も、大重量をもって揺れ、右手の反復運動に弾みを持たせる。樹液はますます多くなり、尻の谷間を上昇し、反らせた背中にまで届いた。
（気持ちいいの……す、すごすぎてやめらんない……！）
双穴もろともかき混ぜられて、頭の中はとろとろだ。肉悦の奔流が、お腹とお尻の両方に氾濫し、秘粘膜を熱く溶かされる。
白濁した発情汁が薄布の股底を満たす。濃紺に濡れ染まったスクール水着の中では、養分を待つ触手の一群が、汗みずくの肌を舐めまわしていた。
「もっとおぉっぐ、あもっ、むちゅっぱ！」
欲張りな肉穴少女は、喘ぐ唇を自ら塞いで、好物のペニスを咀嚼する。張り詰めた腐肉の硬さを、舌と唇で反芻し、ずる剥けの雁首をチュウッと吸い上げもした。
腐臭にも苦味にも慣れてしまって、さっきまでは働いた嫌悪感は沈黙している。
「んもごっ、はぢぅう！　ぶっろぃの、もふぉむっ、ずるぢゅる！」
ズチャッ！　グチャ、ヌチャヌチャ！　ヂュパチュパッ！　ヌリュヌリュヌリュ！
エラ張りの勃起を抜き挿しされる肉壺は、強すぎる快感に痺れついた。花茎の極太ごと少女の右手に牽引される尻穴も、異物を苛烈に食い締める。
「あぶっお！　はおむっ、ぢるぅ、はあっおぐ」
Ｐスポットを連打されながら、直腸は自分で深めに攪拌する。甘美な肉悦に、オリオン

サンズは一匹の肉穴奴隷と化し、見境なく勃起ばかり欲しがった。
「おひん、ひん……っろお！　ぶっろいのが欲しいの、はぐっもっぶぉ！」
見るも卑猥なアクメ顔で雁太をしゃぶり、左手では別の一本をシェイクしてまで、肉体の快楽に溺れる肛門少女。魔物のピストンと競える速度で、しなる茎を引っ張り、アナルで吸い込む。その右手は、暴れ馬の縄を握るかのようだ。
ずぶ濡れのスクール水着は色濃く蒸れ、波打つ腰の、胴まわり三百六十度を触手に舐め上げられる。双乳がまたセーラー服の裾をあげ、尖った芽をちらつかせた。
「いぃ、イぐ！　もぉイぐっ、おおっ、おま〇ごも、おむりも！」
粘膜器官の最奥が炸薬のごとく、打たれるたびに火を放つ。官能の赤熱が悶える少女を包み込む。左手の剛直を握り締めて、アンバランスな姿勢を起こし、太陽のセーラー戦士は尻穴遊びを勢いよく加速させた。
「んもっごほお！　あぶっ、んぢゅるるッ、はむぢゅう！」
秘裂への杭打ちも速度をあげ、魔物たちは玉の雫を逸物に伝わらせる。
ヌチャッグチャッブチュッヌプヌプッヂュポヂュポッヂュポ！
集団レイプに悩乱を極めた優夏は、赤腫れた亀頭を舌で弾き出し、上下の歯で涎を引いた。山吹色のショートヘアを首でかきまわすように仰向いて、うっとりと虚空を見詰め、腰と背中を同時に打ち震わせる。
「イっひゃうもぅ、イクっ、オチンチンいぃっ、オチンチン気持ちよふひて！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/